

## 02 英米文学専攻

## English and American Literature

### (1) 修士課程

#### ● 目的

英米文学専攻は、本学建学の理念に基づき、英語・英米文学を総合的に研究することによって欧米文化の精髓に触れ、かつその文化の底流をなしているイギリス人やアメリカ人の個人的及び集団的エトス・精神構造を究明(理解)することを主たる研究目的とし、またそうした研究領域についての深い学識と幅広い教養を身につけた異文化理解に意欲をもつ人材の育成に専念することを教育理念としている。

#### ● 修了認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

本専攻修士課程に2年以上在学し、所定の単位を30単位以上(選択科目22単位以上、1・2年次における指導教員の演習それぞれ4単位ずつ)を修得しなければならない。指導教員による研究指導を受け、英米文学、英語学、英語教育に関する修士論文を提出し、論文審査及び最終試験に合格しなければならない。専攻する分野において必要とされる学識、能力、技能を有することが認められた者に、修士の学位が授与される。  
DP：ディプロマ・ポリシー

	専門分野の知識や技能の活用力
(DP1)	英米文学、英語学、英語教育に関する高度な専門的学識と幅広い教養、高度な英語力を身につけている。国内外の教育研究の場やこれらの専門性が必要とされる職業において、グローバルな活躍と貢献をなすことができる。
	情報分析、課題設定および問題解決能力
(DP2)	英米文学、英語学、英語教育に関する基礎的な知識や先行研究を土台として、そこから主体的に疑問点を見出し、自らの課題を設定することができる。また、関連する情報を収集して分析を重ね、論理的に自らの課題を解決し、新たな知見を見いだす創造性を兼ね備えている。
	コミュニケーション能力
(DP3)	英語による論文の作成や研究発表の機会において、自らの意見を論理的かつ明確に伝えることができる。同時に、他者の考えと価値観を尊重しつつも、自らの専門的な学識に基づいて建設的な批判を行い、専攻する研究分野の発展のために協働的姿勢で研究に取り組むことができる。また、研究倫理を遵守し、適切な方法やツールを用いて自らの考えをグローバルに発信することができる。

#### ● 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

少数精鋭の指導や個別指導を行い、院生各自の研究テーマに合わせた、入念な指導を行うための教育システムが構築されている。1年目より「英米文学」の文学系、「英語学」と「英語教育」の言語教育学系、それぞれの専門科目を配置して幅広い知見に触れる機会を提供し、様々なジャンルの英米文学作品の精読に加えて、論理的思考力を要する論文記述の方法論を習得する目的から、英語で書かれた論文や評論の輪読も行われる。これに加えて、各自の専門分野の学会や研究会で発表する力をつけるために、年数回の口頭研究発表の機会を設けており、その研究成果を紀要論文集「試論」に投稿できる。この紀要論文執筆の過程において、院生は指導教員のチェックを受け、文学系、言語教育学系の各専攻分野における研究に関する広範な知識と研究を深化させる分析力を身につけ、自らの議論を論理的に組み立てる能力が培われる。院生は合計2本の論文を紀要論文集「試論」に発表できる。こうした一連の取り組みは、最終的に修士論文作成に活かされることを念頭に置いている。また、他専攻や交流協定校「学生交流協定(他大学大学院及び大学共同利用機関履修)」の授業科目、合計10単位を上限として履修できる環境にある。この履修制度は院生各自の見識を広める事に役立っている。

#### 1. 教育内容

- 1) 講義科目は、専門基礎力及び学術研究技術の基礎を涵養し、理論的、実践的基礎を築くために開講する。
- 2) 演習科目は、専門領域・研究課題に応じて修士論文・課題研究の作成上必要とされる指導や議論を繰り返すことにより、緻密な研究指導を行う。
- 3) 1～2の集大成として提出される修士論文または課題研究を完成させ、それについて、審査及び最終試験を実施する。

#### 2. 教育方法

- 1) 講義科目では、基礎的な研究手法や研究能力を体得し、少人数での個別・グループ形式で授業を行う。
- 2) 演習科目を中心とする修士論文の作成指導においては、教員と学生の間で「学位授与の方針」及び「学位論文審査基準」を共有し、密接なコミュニケーションをとりながら実施する。
- 3) それぞれの授業科目を組織的に履修することにより、専門性を追求しながらも狭量な思考に偏らないよう、指導教員を中心に指導を行う。
- 4) 修士論文の審査にあたっては、主査1名と副査2名以上で構成される審査委員により、「学位論文審査基準」に則って厳格な審査がなされる。最終試験においては、「学位授与の方針」に基づき、学位授与に必要とされる専門的な学識、技能、研究能力を身に付けていることを詳細に確認する。
- 5) 研究倫理教育は、一般的な内容についてはeラーニングなどの方法を用いて広く提供し、各専門分野特有の研究倫理については、研究指導

を通じて指導することにより補完する。

- 6) 学生調査・アンケート等の結果に基づく客観的な評価指標によって検証を行い、検証結果を教育内容や教育方法の改善へ積極的に活用し、学生へのフィードバックを行う。

### 3. 評価

修士課程では、修了認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)の3つのポリシーに基づき、学生の入学時から修了時までの成長を視野に入れ、英米文学専攻の教育課程レベル、科目レベルの2段階のレベルで学習成果の評価・測定を行う。

#### ● 修了の要件

1. 修士課程に2年以上在学し、30単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 各年次の履修単位数は、原則として1年次は指導教員の演習4単位を含む20単位以上30単位未満とし、2年次は指導教員の演習を含む4単位以上とする。

年次	必修科目	選択科目	合計
1年次	指導教員の演習4単位	22単位以上	30単位以上
2年次	指導教員の演習4単位		

#### ● 履修上の注意

1. 履修科目の選択にあたっては、指導教員の指導を受け、研究テーマに関連の深い全科目にわたって履修すること。
2. 指導教員が必要と認めた場合には、指導教員以外の演習科目の中から10単位、他専攻の講義科目の中から4単位を上限に履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。
3. 指導教員が必要と認めた場合は、交流協定校「学生交流協定(他大学大学院および大学共同利用機関履修)(P.20)」の授業科目を履修することができる。
4. 他専攻修得単位・他大学大学院修得単位・協定(認定)校留学により修得した単位は合計10単位を上限として、修了に必要な単位として認定することができる。
5. 他系統学部出身者には、当該専攻の基礎学部出身者と同等の基礎学力を充足させるため、大学院の正規授業科目以外に指導教員が必要と認めた場合、学部で開講している関連基礎科目(指導教員の指定する科目)の特別履修を課すことがある。ただし、関連基礎科目の単位は認定しない。
6. 一度単位を修得した科目は、担当者が異なっても再度履修することはできません(指導教員の演習科目を除く)。

#### ● 学位論文について

##### 〈学位論文審査基準〉

1. 研究テーマの選択が適切であること。
2. 言語表現が的確であり、形式と体裁に関する規定が守られていること。
3. 論文構成及び論理展開が的確であること。
4. 先行研究を適切に援用していること。

##### 〈論文審査・学識確認〉

審査員は、主査1名、副査2名で構成され、副査には必要に応じて他の専攻、大学、研究所などに所属する専門家を含むことがある。最終試験は、提出された論文を踏まえ、審査員が、口頭試問形式により学識確認を行う。上記審査基準により、主査・副査が点数を付け、その平均点をもって修士論文の評点とする。成績評価は履修科目と同様の基準で付される。

なお、論文作成要領・提出要領と、提出された論文の取扱いについては、21ページ以降を参照すること。

● ルーブリック【修士論文・課題研究】

DP	評価項目	評価の視点	S	A	B	C
1) 研究主題の設定理由・目的の明確性	目的の明示	発展可能性	より重要な研究へと発展することが確実なテーマである	より重要な研究へと発展することが可能なテーマである	より重要な研究へと発展することが可能性の有無については不明確である	より重要な研究へと発展する可能性の見込めないテーマである
		目的の明示	研究の目的が明確に述べられており、その目的のために当該研究で何をどう進めていくのかというプランも明確にされている	研究の目的は述べられており、その目的を達成するためにどのように進めていくのかもほぼ明らかである	研究の目的はおおよそ述べられており、その目的を達成するためにどのように進めていくかはやや不明確である	研究の目的が明確には述べられていない
2) 研究の社会的意義・貢献性	研究の社会的意義・貢献性	現代社会、国際社会における課題の解決や理解の深化に直接関連するテーマを設定している	現代社会、国際社会における課題の解決や理解の深化に関連するテーマを設定している	現代社会、国際社会における課題の解決や理解の深化にほとんど関連しないテーマを設定している	現代社会、国際社会における課題の解決や理解の深化とは無関係なテーマを設定している	
3) 研究の主体性・独自性	独自性	関連する先行研究を網羅した上で、当該論文のテーマが独創的であることが明確に示されている	関連する先行研究に当該論文と類似するテーマがないわけではないが、独自性を有すると認められる	すでにほぼ同様のテーマの先行研究があるが、独自性を有するとも言える	すでに同様のテーマの先行研究が存在しており独自性は認められない	
4) 研究方法論の適切性・妥当性	計画・準備	計画・準備	指導教員との協議を通して研究計画書を作成し、研究レビュー、データ収集、分析、執筆など具体的な活動をいつ実施するか明確である	指導教員との協議を通して研究計画書を作成し、研究レビュー、データ収集、分析、執筆など具体的な活動をいつ実施するかほぼ明確である	指導教員との協議を通して研究計画書を作成したが、研究レビュー、データ収集、分析、執筆など具体的な活動をいつ実施するかやや不明確である	いつ何をどこまで進めるか研究計画が立てられていない
		研究倫理	研究に関わる倫理上の問題について、大学が指定した研究倫理eラーニングを受講し、十分に考慮し、必要な対応を済ませた上で、研究活動を行っている	研究に関わる倫理上の問題について、大学が指定した研究倫理eラーニングを受講し、十分な考慮と必要な対応を行いつつ、研究活動を行っている	大学が指定した研究倫理eラーニングを受講したが、研究に関わる倫理上の問題への考慮・対応が十分とはいえない	大学が指定した研究倫理eラーニングを受講しておらず、研究に関わる倫理上の問題について検討していない
		研究方法の適切性	研究目的を達成するために最も適切な研究方法を選択している	研究目的を達成するために適した研究方法を採用している	研究目的を達成するのにふさわしい研究方法であるかやや疑問である、あるいは他にさらに適当な方法が存在している	研究目的と研究方法が合致していない
5) 引用された文献・資料の十分性・適切性・妥当性	データ・資料の量	研究目的を達成するために選択した研究分析方法を実施するのに十分適合する量のデータ・資料を収集している	研究目的を達成するために選択した研究分析方法を実施するのにほぼ十分な量のデータ・資料を収集している	データ・資料を収集しているが、選択した研究分析方法を実施するのに十分な量とは判断し難い	収集した量のデータ・資料では、選択した研究分析方法を実施できない	
6) 結果考察の妥当性	結果の明晰性	研究課題についての考察の結果をきわめて明晰に論じている	研究課題についての考察の結果をほぼ適切に論じている	研究課題に関する結果報告に、必要とはいえない議論や冗長な論述のために理解しにくい箇所がある	研究課題についての考察の結果が述べられていない	
7) 論旨の一貫性・連続性・論理性	結果の解釈とまとめ	参考資料や得られたデータに基づいて客観的で公平な解釈をおこなっており、予想や仮説に一致しない結果も重要な結果として捉えている	参考資料や得られたデータに基づいて客観的で公平な解釈をおこなっており、予想や仮説に一致しない結果は例外として扱っている	結果の解釈そのものに歪曲はないが、一部に予想や仮説に一致した点だけを結果として捉えている箇所がある	予想や仮説に一致する結果だけを報告している、あるいは結果の解釈に一部歪曲が認められる	
8) 当該専門分野における先行研究の成果を十分に踏まえているか	成果の水準	当該分野において、これまで解決できなかったことを解決する知見、あるいは新しい事象の発見を参考資料や得られたデータに基づいて提供している	当該分野において有意義な知見や発見を参考資料や得られたデータに基づいて提供している	得られた知見が、当該分野において有意義なものといえるかどうか、やや疑問が残る	当該分野において有意義な知見が得られたとはいえない	
9) 独自の研究成果が学術論文の形式でまとめられているか	記述法・ルール	論文の本文は学術的な記述法で書かれ、当該分野の学会で一般的に利用されている執筆規定に従って書かれている	論文の本文は学術的な記述法で書かれ、当該分野の学会で一般的に利用されている執筆規定にもほぼ従っている	論文の本文は学術的な記述法で書かれたというには不十分であり、当該分野の学会で一般的に利用されている執筆規定に従っていない部分がある	論文の本文は学術的な記述法で書かれておらず、当該分野の学会で一般的に利用されている執筆規定にもあまり従っていない	

… 研究計画書や中間発表の時のみのチェック項目

● 開講科目

科目名称	学習方法	単位数	開講期間	担当者	DPとの関連性			備考
					DP1	DP2	DP3	
英文学特講Ⅰ	講義	4	通年	川崎明子	◎	○		
英文学特講Ⅱ	講義	4	通年	大淵利春	◎	○		
英文学特講Ⅳ	講義	4	通年	上石実加子	◎	○		
英文学特講Ⅴ	講義	4	通年	モート、セーラ	◎	○		
英文学特講Ⅵ	講義	4	通年	逢見明久	◎	○		
米文学特講Ⅰ	講義	4	通年	川崎浩太郎	◎	○		
米文学特講Ⅲ	講義	4	通年	本村浩二	◎	○		
米文学特講Ⅳ	講義	4	通年	吉田要	◎	○		
英語学特講Ⅰ	講義	4	通年	北原賢一	◎	○		
英語学特講Ⅱ	講義	4	通年	篠原俊吾	◎	○		
英語学特講Ⅲ	講義	4	通年	木村博子	◎	○		
英語学特講Ⅳ	講義	4	通年	佐藤真二	◎	○		
英文学演習Ⅰ	演習	4	通年	逢見明久		◎	○	
英文学演習Ⅱ	演習	4	通年	川崎明子		◎	○	
英文学演習Ⅲ	演習	4	通年	上石実加子		◎	○	
英文学演習Ⅳ	演習	4	通年	大淵利春		◎	○	
英文学演習Ⅴ	演習	4	通年	モート、セーラ		◎	○	
米文学演習Ⅰ	演習	4	通年	川崎浩太郎		◎	○	
米文学演習Ⅲ	演習	4	通年	本村浩二		◎	○	
英語学演習Ⅰ	演習	4	通年	北原賢一		◎	○	
英語学演習Ⅱ	演習	4	通年	佐藤真二		◎	○	

◎：特に重視している ○：重視している

## (2) 博士後期課程

### ● 目的

英米文学専攻は、本学建学の理念に基づき、英語学・英米文学における高度で専門的な知識と教養をもち、社会的にまた国際的に貢献しうる人材を育成することを目的とする。

### ● 修了認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

修士の学位や、それに相当する学位をすでに保有しており、本専攻博士後期課程に3年以上在学して、所定の単位(12単位以上、1年次、2年次、3年次における指導教員の講義4単位及び研究指導)を修得しなければならない。指導教員による研究指導を受け、英米文学、英語学、英語教育を究明した論文を提出し、論文審査及び最終試験に合格しなければならない。専攻分野において総合的、専門的、学術的、国際的な研究を行い、高度な専門性が要求される職業に必要な学識、能力、技能を有し、今後も国内外の研究職・教育職において大いに活躍ができると判断される者に、博士の学位が授与される。

DP：ディプロマ・ポリシー

	高度な専門分野の知識や技能の活用力
(DP1)	英米文学、英語学、英語教育に関する高度な専門的学識と、幅広い知見を身につけている。また、高度な英語力をもとに、それらを総合的に活用する汎用性を発揮し、専門分野におけるフロンティアを切り拓き、国内はもとより国際的な場においても新たな知見や価値を創造、提案し、還元していくことができる。
	情報分析、課題設定および問題解決能力
(DP2)	自律した研究者として、独創的な観点から課題を設定し、英米文学、英語学、英語教育に関する専門的な学識や高度な英語力を駆使して継続的に研究を遂行できる。さらに、最先端のツールや手法によって、専門に関わる知識や情報を収集するだけでなく、それらを適切に分析することによって、今までにない知見を導き出すことができる高度な研究力を有する。
	コミュニケーション能力
(DP3)	学術論文の執筆や国内外の学会での発表などを通じて、自らの独創的な研究成果や新たな知見を国際社会に発信できるのと同時に、他者の考えと価値観を尊重しつつも、自らの専門的な学識に基づいて建設的な批判を行い、論理的に学術的な議論を展開するなど、主体的に協働することができる。また、研究倫理を踏まえ、適切なツールを用いて自らの研究業績をグローバルに発信し、自ら導き出した新しい知見を実社会に還元することができる。

### ● 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

指導教員の個人指導が中心となり、博士の学位取得を目的として、専門性の高い演習方式の教育を行う。修士課程や実社会で養った専門知識と研究能力をさらに洗練させ、各自の研究テーマを自由に独創的に深化できるカリキュラムが編成されている。院生は指導教員との活発な議論を通して、その研究分野、世界、実社会に大きく貢献できる人材へと成長する。また、その研究成果は博士論文として発表できるが、そのための個別指導・支援体制・学位審査制度が整備されている事は言うまでもない。院生は指導教員の講義と研究指導を毎年履修し、指導教員による段階的・系統的な指導を受けられる。この所定の科目は12単位であるが、分析力や批評眼を養うため、指導教員以外の科目を選択科目として履修する事もできる。修士課程在籍者と共同開催する年数回の「院生研究発表会」での口頭発表や、紀要論文集『試論』への投稿を通じて、博士論文執筆作業の補完がなされる。院生は合計3本の論文を『試論』に発表できる。

#### 1. 教育内容

- 1) 講義科目は、豊かな専門知識と研究能力のさらなる向上を目的として、先行研究の批判的検討、文献講読、データ収集、論文作成方法等に関して指導を行う。
- 2) 研究指導科目は、専門領域・研究課題に応じて、博士論文の作成で必要となる指導や議論を繰り返すことにより、きめ細かな研究指導を行う。

#### 2. 教育方法

- 1) 講義科目では、基礎的な研究手法や研究能力を体得し、少人数での個別・グループ形式で授業を行う。
- 2) 研究指導では、課題設定の独創性、研究計画の妥当性や実現性について客観的に評価・助言し、論文や学会発表の指導を行い、博士論文作成に向けての研究業績を積み上げるよう促す。
- 3) 研究指導を中心とする博士論文の作成指導においては、教員と学生の間で「学位授与の方針」及び「学位論文審査基準」を共有し、密接なコミュニケーションをとりながら実施する。
- 4) 講義科目と研究指導科目は単独のものではなく、有機的な関連をもって各学生の研究活動を支える。
- 5) 博士論文の提出については、指導教員が進捗状況だけでなく、英米文学専攻で定める「提出要件」を満たしていることを確認する。提出された博士論文の審査にあつては、主査1名と副査2名以上で構成される審査委員により、「学位論文審査基準」に則り厳格な審査がなされる。最終試験においては、「学位授与の方針」に基づき、学位授与に必要なとされる専門的な学識、技能、研究能力、語学力を身に付けていることを詳細に確認する。
- 6) 研究倫理教育は、一般的な内容についてはeラーニングなどの方法を用いて広く提供し、各専門分野特有の研究倫理については、研究指導を通じて指導することにより補完する。
- 7) 学生調査・アンケート等の結果に基づく客観的な評価指標によって検証を行い、検証結果を教育内容や教育方法の改善へ積極的に活用し、

学生へのフィードバックを行う。

### 3. 評価

博士後期課程では、修了認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)、入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)の3つのポリシーに基づき、学生の入学時から修了時までの成長を視野に入れ、英米文学専攻の教育課程レベル、科目レベルの2段階のレベルで学習成果の評価・測定を行う。

#### ● 修了の要件

1. 博士後期課程に3年以上在学し、かつ、所定の科目(指導教員の講義)について12単位以上修得し、必要な研究指導を受けたうえで、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 指導教員の講義と研究指導は、毎年履修すること。

年次	必修科目	選択科目	合計
1年次	指導教員の講義4単位および研究指導	修得単位は任意	12単位以上
2年次	指導教員の講義4単位および研究指導		
3年次	指導教員の講義4単位および研究指導		

#### ● 履修上の注意

指導教員が必要と認めた場合は、選択科目として指導教員以外の講義を履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。

#### ● 学位論文について

##### 〈中間報告書の提出〉

中間報告書の内容は以下のとおりとする。

1. 中間報告書の提出の時期は博士後期課程2年次の6月とし、英米文学専攻に提出する。
2. 提出予定の博士論文の「研究の意義」を英語で提案し、論文構成を明らかにする「章立て」(目次案)を英語で示した上で、論文の核をなす論旨について素描的にまとめた「論文の構想」を英語で記述し、「参考文献目録」をつけること。別途、提出を予定する博士論文の1章の草稿を添付することとし、既発表論文の抜き刷りをもって代替できるものとする。このほか、4000字程度の日本語で書いたレジюмеを添付することとする。
3. 報告書の原稿はA4判とし、書式はMLAに準拠し、横書き1ページ25行約300語とする。なお、日本語レジюмеの体裁は40字×30行とする。
4. 報告書の枚数は25枚程度を基準とする。
5. 報告書は必ず簡易製本して提出すること。コピーを2部同時に提出すること。
6. 内容については事前に指導教授と相談し、許可を得ること。

##### 〈事前審査〉

###### (資格審査)

博士後期課程1年次終了以降、研究計画書2部および資格審査論文(博士論文のテーマに関係し、学術誌への投稿を目指すレベル)2部を英米文学専攻に提出し、審査を受ける。

###### (予備審査)

資格審査合格者で、博士後期課程修了に必要な単位の修得が見込まれ、指導教員の承認を得た者は、3年次の10月迄に博士論文の草稿2部、成績証明書・修了見込証明書各1部を英米文学専攻に提出し、審査を受ける。

##### 〈学位論文審査基準〉

1. 研究テーマの選択が適切であること。
2. 言語表現が的確であり、形式と体裁に関する規定が守られていること。
3. 論文構成及び論理展開が緻密で的確であること。
4. 先行研究を適切に理解したうえで、独自の知見の提示がなされていること。
5. 高度な学術的、学際的、社会的意義を有していること。

##### 〈論文審査・学識確認〉

審査員は、主査1名、副査2名以上で構成され、副査には必要に応じて他の専攻、大学、研究所などの専門家を含むことがある。上記の基準により、論文審査を実施する。最終試験は、審査員が、提出された論文に基づき、口答または筆答による学識確認を行い、外国語試験は予め申請した1か国語(母語は不可)で実施する。審査結果は、研究科委員会において報告される。

なお、論文提出要領等については、25ページ以降を参照すること。

● 開講科目

科目名称	学習方法	単位数	開講期間	担当者	DPとの関連性			備考
					DP1	DP2	DP3	
英文学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	逢見明久	◎	○		
英文学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年			○	◎	
英文学特殊研究Ⅱ	講義	4	通年	川崎明子	◎	○		
英文学研究指導Ⅱ	研究指導	—	通年			○	◎	
英文学特殊研究Ⅲ	講義	4	通年	上石実加子	◎	○		
英文学研究指導Ⅲ	研究指導	—	通年			○	◎	
英文学特殊研究Ⅴ	講義	4	通年	モート、セーラ	◎	○		
英文学研究指導Ⅴ	研究指導	—	通年			○	◎	
米文学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	川崎浩太郎	◎	○		
米文学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年			○	◎	
米文学特殊研究Ⅲ	講義	4	通年	本村浩二	◎	○		
米文学研究指導Ⅲ	研究指導	—	通年			○	◎	
英語学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	佐藤真二	◎	○		
英語学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年			○	◎	
英語学特殊研究Ⅱ	講義	4	通年	北原賢一	◎	○		
英語学研究指導Ⅱ	研究指導	—	通年			○	◎	

◎：特に重視している ○：重視している